

外国人の日本語、日本人の日本語

—言葉の問題から教授法の問題へ—

中川正弘

0. はじめに

日本語がある程度できる外国人と話をしている、その言いたいことがだいたい分かる時、いくら日本語教師だからといって、間違いやおかしなところを片っ端から直していったりすることはないだろう。意志の疎通が目的なら、そこで使われる言葉自体の問題は副次的なものに過ぎないからだ。言い間違いや文法の間違いなどもそれが間違いだと分かる限り、つまり言いたいことが分かる限り、クレームなどつけないだろうし、日本語と外国語のチャンポンだって、それでお互いに理解しやすくなるなら、それでかまわないと思うのも自然なことだ。

多少不鮮明な発声や分かりにくいところのある言葉遣いでも、慣れて、その「傾向」がはっきりと見えてくれば、最初はズレとしか感じられなかったものがその外国人の「声」、「スタイル」のような個性の表現と感じるようになる。このような「外国人なまり」は、テレビ・タレントが芸としてマネるぐらいだから、方言やお国なまりと並ぶ、ただの色付き、におい付きの日本語と言えなくはない。

しかし、お互いの考えをただ日本語で伝え合うのではなく、日本語という言葉を教えるとなると事情は違う。今度は話の内容を押さえたうえで、あるいは、話の内容よりも、言葉そのものに含まれているさまざまな意味、表現価値の方に焦点を合わせなければならなくなる。

母語が異なる、例えばアメリカ人学習者と中国人学習者では、使う日本語の傾向やズレもそれ相応に違っているだろう。そして、このような差異の分析、あるいはその前段階とも言える各国人との間違い傾向の分析において何らかの形で比べられることで、「日本人の日本語」もだんだんとはっきりしてくる。だが、ある国の人間が使う日本語の傾向を分析したり、それを他の国の人間が使う日本語と比べる前に、「日本人の日本語」を前面に出し、国を問わず、外国人の日本語がどんな「外れ方」をするのか見ることも必要ではないだろうか。それらがどうして「外れている」と見えるのか、この判定を発するところに「日本人の日本語」があるのなら、言わば、「日本人の日本語」という鏡に「外国人の日

本語」を映しているようなものだし、同時に「外国人の日本語」という鏡に「日本人の日本語」を映していることにもなる。内部で、あるいはこちら側で、日本人の日本語どうしを比べているだけでは見えないが、このように視点を変えることで見えてくるものもあろう。「日本人の日本語」の「輪郭」は、アメリカ人の日本語でも、中国人の日本語でもなく、「非日本人の日本語」という、曖昧ではあっても包括的なものとの接点によって描かれるはずだ。

1. 日本人の日本語感覚

わたしたちは自分の言葉と同質の言葉に対してはほとんどその存在を感じない。言葉は、そこに何か異質なものが混じった時のみ抵抗を持ち、物質化し、ある種の感覚を呼び起こす。さて、以下に並べるのはどれも外国人の書いた作文から何か異質なものが含まれていると感じるところを拾い上げたものだが、わたしたちはそこに何を感じ、何を考えるだろうか。

- 日本に来たばかりの時、日本語がぜんぜんだめだった。
- 生活費が高いですから、ちょっとたいへんですね。
- 1年半日本語を勉強したが、まだまだ日本語がへたです。
- なぜなら、日本語には漢字が多くて、読んで理解するのは難しくありません。
- テレビでサッカーを観て楽しいです。
- 大学で学者をしています。
- 母は家族の主婦です。
- 日本の若者と楽しむことができました。
- 高校や大学で日本語を勉強しました。
- いろいろな国に住みに行きました。
- 日本語がまだ下手なので、日本人と少しだけ話すのができます。
- わたくし、・・・先生の学生です。
- 日本に来た前、ずっと杭州に住んでいました。
- 国では雪と雨が降りません。
- 冬の風景は夏よりもっと美しいです。
- 私はふるさが愛しています。
- 市民球場でカーブを応援に行きました。
- 富士山は近くを見たら思ったよりそんなにきれいではありませんでした。

日本人なら誰にもはっきりと分かる単純な間違いもある。しかし、人によっては、いったんどこが間違っているんだと疑問に思うような文もあるだろう。また、自分では使うことがないと感じていても、どこかで日本人が使っていたという記憶があるので、間違いと

はしないものもあるはずだ。さらに、普通の日本人なら使わない文型ではあるが、文法としては間違いがなく、翻訳文体のようなものだから、外国人の日本語ならこれで構わないと判断する場合もあろう。さて、みんなが同じ反応、判断をするものはこの中にたしてどれくらいあるのだろうか。

普通忘れられているこのような言葉のあり方が露呈することはあまりない。上のような外国人の書いた日本語は、わたしたち自身の日本語の言葉の最表部に宿る感覚を浮き彫りにしてくれるのである。

2. 文法／慣用／表現

「外国人の日本語」と「日本人の日本語」とが識別しやすくなるのはやはり文法に視点を置いた時である。しかし、外国人の使う日本語の特異点を単純に「誤り」と言い切ることができるだろうか。文法の間違ってないものが「日本人の日本語」で、規則に違反した間違いが含まれるものが「外国人の日本語」だと考えるのはあまりにも率直すぎる。規則に違反するのは外国人に限らない。と言っても、それは、日本人の中にも違反する者がいるからという意味ではない。「正しい／間違い」という基準だけでは説明のしにくい「違反」もあるのだ。

疑問文に対する答えは、「していますか」なら「しています／していません」、「しますか」なら「します／しません」が正しい対応だ。日本語教育でも、このような対応を規則として扱い、学習者はこれをどこでも使おうとする。ところが、このようなものが出てくる。

していますか	→	しています／していません
しますか	→	します／しません
知っていますか	→	知っています／(×知っていません)
(×知りますか)	←	知りません

「知っていますか」という質問に「知っていません」と答える学習者、また、「知りません」をよく覚えているのだろう、これからの逆形成で「知りますか」という言葉を使う学習者は多い。「日本人の日本語」では、どうして対応を破って、「知っていますか」に「知りません」と答えるのか、これは規則の体系としての文法内の問題ではなく、「慣用」という、時に文法を切り崩してゆく力の問題だろう。先の例に似ているようでも次のものなら、疑問文と否定の答えのそれぞれで二つの表現が状況によって同義性をもち、そのうえで選ばれる言葉に揺らぎが出るとでも説明できるのだが、「知っていますか」と「知り

ますか」を同義とは言えない。

～するつもりですか

～するつもりはありません

～するつもりではありません

～するつもりがありますか

～するつもりはありません

「慣用」は「文法」を破壊ばかりするわけではなく、当然「文法」を形成してもいくわけだから、この二つは互いに支え合っていると云わねばならないが、「正しい／間違い」という視点が据えられるのは本来このように二つが組み合わされた不安定な土台の上である。そして、さらに不安定な「表現」という側まで含めて言葉を見ることが往々にして必要になる。

● 7時に来ろう（文脈から見ると、来るように誘う言葉）。

この文を間違いだということで書き直そうとした時、候補としてざっと以下のものくらいは上がっておかしくない。

- 7時に来る。／来ない。（上がり調子）
- 7時に来い。／来ないか。
- 7時に来なさい。／来ませんか。
- 7時に来てくれ。／来てくれないか。
- 7時に来てくれる。／来てくれない。（上がり調子）
- 7時に来てもらえる。／来てもらえない。（上がり調子）
- 7時に来てくれますか。／来てくれませんか。
- 7時に来てもらえますか。／来てもらえませんか。
- 7時に来てください。
- 7時に来てくださいますか。／来てくださいませんか。
- 7時に来ていただけますか。／来ていただけませんか。
- 7時に来ていただけませんかでしょうか。
- 7時に来ていただきたいのですが。

.....

これに、「来て」と入れ替え可能な「いらして／いらっしゃって／おいでになって」、文末に助詞「よ／ね／な／の」などを掛け合わせるといったいどれほどの数になるだろうか。「慣用」が用意したこれだけのものの中から一つを選ぶこと、それは既に「表現」に属する行為であろう。

「正しい／間違い」という視点で言葉を見ていると、一つの間違いいに対しては一つの正

しい用法しかないように感じやすい。「外国人の日本語」をそのような視点でしか見ないなら、これを鏡として映し出される「日本人の日本語」のほうもきわめて平板なものになるだろう。一方、「日本人の日本語」に、時にはこれだけのヴァリエーションがあり、「慣用」と「表現」がやはり言葉の本質の一部をなしているということを忘れずに「外国人の日本語」を見れば、その言葉を発した人間の非意図的な表現のように感じられてこよう。

3. 二つの文体と比較の場

日本語学習に作文練習を効果的に組み込む可能性、これは授業として特に設定されていない場合でも授業担当者がレポートを書かせるなど、課外練習として課したり、学習者が自主的に行ったりする補助的な練習メニューとしてではなく、コース、カリキュラムの中にしっかりと定位する授業としてどのような形態がありえるかを以前論じた²⁾。それは、時に教科書を用いて作文の「書き方」を講義するという設定で、結局、「読む」、「聞く」ばかりになる授業でも、授業時間に考えさせながら「書く」練習だけをさせる授業でもなく、予め提出させた作文を徹底的に分析解説するという設定の授業であった。そして実践として、学習者が理解しやすくなるように授業で扱う作文と教師が書き直した添削文は以下に例示するようにワープロ文書化し、その二つの文章を「外国人の日本語」と「日本人の日本語」として比べ、誤りの分析、意味の違い、文体の印象や効など、あらゆる差異を考えさせ、解説を行ってきた。

A 「無題」

今朝、目が覚めると8:40am。わっ！もう遅刻するわ！さっさと起き、ベッドも片付けなく、すぐストーブをつけ、洗面台へ向かった。一番速いスピードで顔を洗い、顔の水を拭きながら、コーヒーを入れ、パンを焼き、バターを冷蔵庫から出した。全ての準備ができてから、ストーブのそばに服を着替え、髪にヘッド、バンドを付け、パンを食べた。9:00amに部屋からでて、自転車に乗り、一生けん命学校へ向かった。道側においてある自転車、ポスト、植物などが雪にかぶっていた景色を見るひまもなかった。厳しい寒さの中に、時間と競争しているように自転車に乗って学校に着いた。言うもなく、さっさと階段をのぼり、教室の前に着いた。「スット」ドアをあけて、中は暗くて、2、3人の学生しかいなかった。

「なんだ！休講！あ．．．！」教室の中にいる人が私のあわてている様子を見て、みんな笑った。また、仲間一人を増えたんだ！と思われるかもしれない。

B 「雪の朝」

今朝、目が覚めると、8時40分。わっ！もう遅刻してしまわうわ！さっととび起き、ベッドの片付けもそこそこに、すぐストーブを付け、洗面台に向かった。大急ぎで顔を洗い、顔を拭きながら、コーヒーを入れ、パンを焼き、バターを冷蔵庫から出した。すべての準備ができてから、ストーブのそばで服に着替え、

髪にヘッド・バンドを付け、パンを食べた。9時ちょうどに部屋を出て、自転車を一生けん命漕いで学校へ向かった。道ばたに止めてある自転車、ポスト、植木などが雪をかぶっている景色をじっくり見るひまもなかった。厳しい寒さの中で、時間と競争するように自転車を飛ばして学校に着いた。言うまでもなく、ダーッと階段をかけ登り、教室にたどり着いた。ソーッとドアをあけてみると、中はうす暗く、2・3人の学生しかいなかった。

「なーんだ！休講かあ！あーあっ！」教室にいた人たちがみんな、私の気抜けした顔を見て笑った。またお仲間が一人増えた、と思われたのだろう。

授業で配布するものはこの2枚のプリントだけで、あとは板書を交えての解説である。原稿用紙1枚、400字を規定分としているのだが、1回90分の授業ではこれを二つ扱うことは難しい。授業の前に家で読んで来させるようにして、当の作文を書いた学生だけでなく、受講する者みんなに疑問点をチェックさせておくと、解説、質疑応答もスピーディになり、なんとか二つ分扱うことができるのだが、扱っている言葉の問題そのものではなく、これに関連した質問まで受け付けたり、こちらからも余談の形で関連事項を引き合いに出したりする余裕も必要なので、一つの作文をゆっくり「解剖」していくほうがいよりだった。

日本人である教師が書き直しの必要を感じたところ、また手を付けなかったところでも何かを感じ、比べておかねばならない言葉などがあるところはすべて解説する、言ってみればそれだけの質問を受けているのと同様の解説をすることにしてるので、書いた本人が熱心なのは当然だが、他の者でも日頃から気になっていた言葉の使い方などが扱われることも多いと感じるのだろう、活発に質問するなど、積極的に授業に参加する者が多かった。

ただこの授業設定は外国語として日本語を学んでいる学生たちの習得能率を上げることだけを考えたのものだったのだが、受講者の人数やこれに比例して教師が処理することになる作文の量など、現実の教室運営に関わる問題も出てきた。

受講者数が10名ていどのクラスだった時、半期15回の授業なら扱える作文の数も15なので、どの受講者の作文も1回は扱える計算になった。そこで、半期の間に少なくとも二つは書いてもらうことにし、それ以上は各自のやる気と能力に応じてできるだけ多く書くよう勧めた。受講者全員一回は自分の作文が授業で扱われるのだが、授業で扱う時間が取れない場合でも、授業で使うものと同じように作成した比較のための二つの文章、「書き直し前」と「書き直し後」のプリントを、書いた本人だけでなく、受講者全員に配布することにしてた。たとえ授業で扱われず、書き直した本人である教師の解説がなくとも、二つの文章、二つの文体を比較しながら読むだけでもながしこちらの意図が理解できようし、そうでなくとも言葉について考え、言葉について疑問を感じるきっかけとなるだけでも十分と思えたのだ。

4. 文体比較と作文教育の統合

年度変わりでクラス編成が変わる頃、教室運営等に関わる問題にどう対処するかあれこれ考えていたところ、新しいクラスが20人をはるかに越えることとなったため、それまでのように1回に作文一つを扱うだけでは受講者全員の作文を1回は扱うという原則は無理となった。また、授業で扱えなくても同様のワープロ文書化したプリントを作文を提出した者に与える、時には受講者全員に配布することにしてはいたのだが、400字の作文を20以上、毎週添削し、文体比較用のプリントを作成するなどどう考えても無理だ。だからと言って、書かせる回数を減らして半期に1回だけというのでは、作文を柱とするはずだった設定がただの誤用分析、文体比較の講義になってしまう。そもそも他人の言葉についての他人の見解を聞くだけにならず、自分の言葉について考える機会を持たせることに意味があると考えての設定だったのだから、作文を書く回数はやはり増やすぐらいでなければならない。作文の数の設定や教材プリントの作成に要する時間の配分を変え、授業設定を調整するしかない。

そこで、一つの作文の分量を400字から200字に短くした。これならそれまでと同じ方式でも1回に二つは扱える。そして、それまで提出された作文の原稿そのものには添削を加えず、ワープロ文書化した後、書き直して二つのバージョンとしていたのは、書き間違いや読み間違い、判読困難を避けるためだったのだが、一つの作文の処理にかかる時間を切り詰め、1回の授業にできるだけ多くの作文が扱えるように、添削はやはり直に原稿に朱書きすることにした。添削を済ませた作文を返却するのは早いにこしたことがない。書き間違いや読み間違い、判読困難を避けるだけなら書き直した後の文章さえプリントになっていれば元の作文を書いた本人には容易にチェックできるはずだ。

結局、授業で配布するプリントは次に示すように書き直した後のものだけになった。原文と書き直し版の二つの文章が比較できなくなるかわりに、書き直しのハイライト部分だけを抜き出したプリントを使うことにした。それには板書する時間を節約するために、書き直しの意味を理解するためには不可欠な言葉や文例も書き添えることにした。

このようにしたことで、それまで間違いだらけの自分の文章が授業でみんなに読まれるのが恥ずかしいと感じ、表現練習はしたいと思っていたがなかなか実際に書いて提出しようとしなかった者も抵抗が減ったようであった。ただ、そのような恥ずかしさを乗り越え、自分が用いる言葉を凝視し、その様態を分析する姿勢が外国語を習得するには必要だとすれば、恥ずかしさを感じる機会が多いほどいいはずなのだ。

[授業プリント例]

「自己紹介」(書き直し後)

- ① 私はI国のEと申します。日本に来ること、それはI国の大学で1年生の時、夢でしかありませんでした。今、それが現実になっているのです。日本に来て、もう3週間になります。一度もホームシックを感じたことはありません。毎日、いろんな国から来た人たちといっしょに生活しています。日本での生活で問題になるのは気候です。私の国とぜんぜん違います。
- ② 日本へ来てからもうそろそろ3週間になる。この3週間、日本語で話す機会がたくさんあった。やはりここは日本だ。S国では三年日本語を勉強したが、あまり日本語で話さなかった。これから日本に一年滞在するが、この機会を生かして日本語能力を高め、日本国内も旅行して、悔いがないようにし、S国へ帰って大学をちゃんと卒業したい。
- ③ はじめまして。W. Aともうします。国はFです。今年の6月に研究生として日本に参りました。この広島大学で先生方の下、日本語教育に関係した勉強をして行きたいと思っております。とくに勉強したいのは入門日本語教授法です。これからよろしく願いたします。
- ④ 私はN国から来たY. Jと申します。今年の一月末、西条に参りました。十二月まで広島大学で日本語と日本文化を勉強しております。N国ではいろいろなことが安くできるので、暇な時にはよく映画を見たり、エアロビクスをしたり、ハイキングをしたり、本当に楽しめます。日本にいる間も、エアロビクスは続けていて、日本舞踊も習っています。日本のみなさまのお陰で日本での生活はものすごく楽しいです。これからもよろしく願いたします。
- ⑤ 私はP国からまいりましたN. Mともうします。今月、岡山県でラテン・アメリカンのミーティングがあったので、私は三日に岡山へ遊びに行きました。ぜんぶで130人が参加しました。ほとんどみんなブラジル人でした。でも、アルゼンチン人やP国人、パラグアイ人もいました。広島に帰る前に後楽園に行きました。とてもきれいででした。おまけに、そこから岡山城が見えるのですが、お城の姿もすごくきれいでした。

●日本へ来たたらもうそろそろ3週間になる。

○日本へ来てからもうそろそろ3週間になる。

●この3週間に日本語で話すの機会がたくさんあった。

○この3週間に日本語で話す機会がたくさんあった。

●S国に3年間日本語を勉強した。

○S国で3年日本語を勉強した。

●今からは日本に1年滞在する。

○これから日本に1年滞在する。

●日本語能力を高まって・・・

○日本語能力を高めて・・・

●遺憾な気持ちをもっていないようにS国へ帰えて・・・

○悔いのないようにし、S国へ帰って・・・

●日本に行くことというのは、国の大学での一年生の時、それは夢ばかりでした。

○日本に来ること、国の大学で一年生の時、それはただの夢でした。

それは夢でしかありませんでした。

●今、実際になりました。

○今、現実になっています。

●日本にいるのはいよいよ三週間になりました。

○日本に来てもう三週間になります。

●常にホームシックしたことはないようです。

○一度もホームシックを感じたことはありません。

●各国から人々と生活を過ごします。

○いろんな国から来た人たちといっしょに生活をしています。

●日本にいる生活の問題になるのは季節です。

○日本での生活で問題になるのは気候です。

●私はN国からY. Jと申します。

○私はN国から参りましたY. Jと申します。

●日本語と日本文化として勉強している留学生です。

○日本語と日本文化を勉強している留学生です。

●N国では色々な事を安くできる。

○N国では色々な事が安くできる。

●よく映画を見るし、エアロビクスをするし、ハイキングに行くし、本当に楽しめます。

○よく映画を見たり、エアロビクスをしたり、ハイキングに行ったり、本当に楽しめます。

●エアロビクスをし続けて、日本舞踊も習っています。

○エアロビクスを続けていて、日本舞踊も習っています。

●日本人のお陰さまで日本で生活するのは楽しいだと思います。

○みなさまのお陰で日本での生活はものすごく楽しいです。

- 風景がすごく美しかったです。 ●後楽園はとてもきれいかったです。
- 風景がすごく美しいでした。 ○後楽園はとてもきれいでした。
- 風景がすごく美しかったです。 ●後楽園はとてもきれかったです。

美しい（ウツクシーい）風景 /ウツクシクーない/ウツクシーかった
 綺麗な（キレイーな） 後楽園

分量を 200 字に減らし、文体比較もハイライト部分だけの解説にすると、このプリント例のように 1 回の授業で少なくとも 5 人分、多い時には 10 人分近く扱うことができる。

表現練習としては自分でテーマを立てるところから始め、競って個性を表現してもらいたいところだったし、1 回に一人分の作文を扱う時には回ごとに変化があるほうがよかったのだが、2 回に 1 回は簡単な課題を出してみることにした。200 字という分量にも見合った課題として、すでにあちこちで使っているはずなので、だれにとっても必要で、1 度はそこで使いそうな言葉や文型を徹底的にチェックしておいたほうがいい「自己紹介」、「故郷紹介」、「日曜日の報告」のようなテーマが適当と思えた。みんなに共通の文型、共通の話題も多く出てくることから関心も高くなる。また、重複するものは一つにまとめるなど解説用のプリントが軽量化できる、つまり 1 回の授業で扱える作文の数をさらに増やすことができるようになった。

5. あとがき

日本語学習者には、多くの言語のうちの一つとしての日本語ではなく、自分の用いる「外国人の日本語」とは違った「日本人の日本語」がどのようなものであるかを知りたいという声も多い。本稿では、これを対象として捉えるための予備的考察を行い、また声となって表れた、あるいは潜在する欲求に答えようと試みたことのあらましと経過を述べた。実践形態は今後も模索が続くが、問題の構図はこれで描けただろう。（了）

注

- 1) 書き直し方が何通りも考えられるものもあるが、ここでは一つづつあげておく。
 - 日本に来たばかりの頃、日本語がぜんぜんだめだった。
 - 生活費が高いので、ちょっとたいへんですね。
 - 1 年半日本語を勉強しましたが、まだまだ日本語がへたです。
 - 日本語には漢字が多いので、読んで理解するのは難しくないので。
 - テレビでサッカーを観て楽しんでます。
 - 大学にいます / で・・・の研究をしています。
 - 母は家にいます。
 - 日本の若者と楽しい時間を過ごすことができました。

- 高校と大学で日本語を勉強しました。
- いろいろな国に行って暮らしました。
- 日本語がまだ下手なので、日本人と少ししか話すことができません。
- わたくし、先生にご指導いただいております。
- 日本に来る前は、ずっと杭州に住んでいました。
- 国では雪も雨も降りません。
- 冬の風景は夏よりずっと美しいです。
- 私はふるさが好きです。
- 市民球場へカーブを応援しに行きました。
- 富士山は近くで見たら思ったほどきれいではありませんでした。

筆者の書き直しと違った直し方を想起する方も多いただろう。それは類義語、類義表現と言ってもその配列には人によって何らかの違いがあるという事だが、使用に際しての優先順とか、選択基準となる配列が生じさせる感覚は、逆に間違いに出会った時に覚える感覚の微妙な違いでもあろう。

- 2) 「作文」を「読む」／「書く」技能の置づけと展開、『留学生日本語教育』、第4号、広島大学留学生センター、1992年。

作文の誤りと文体、広島大学留学生センター紀要、第3号、1993年。

作文と解釈行為、広島大学留学生センター紀要、第4号、1994年。